



THE JAPANESE SCHOOL in LONDON

ロンドン日本人学校だより 11

学校教育目標

自ら学び、心豊かにたくましく
国際社会を生きぬく児童生徒の育成
合い言葉：自立・貢献

2020(令和2)年

月4日発行 ロンドン日本人学校
令和2年度 第5号

新型コロナ災禍を超えて その3 「できることは何か」

校長 石山 秀樹

「皆さん、今日はお疲れさまでした。『ロン日 秋の紅白レクリエーション大会』は、今年度、全校で取り組む初めての行事となりました。今年度は、感染症拡大により、運動会・文化祭といった全校で交流し合える貴重な機会を失ってしまいましたが、こうして今日、全校の皆さんと再び行事を行うことができ、とても嬉しく思います。小学部1年生から中学部3年生までの全学年から、レクリエーション大会に対する熱い思いが、身体の節々まで伝わってきました。

このレクリエーション大会に向けて、小学部6年生と中学部3年生をはじめ、今日までダンスや応援、そして各学年の種目の練習に励んできました。少なく、限られた時間の中で、必要に応じて休み時間や学級の時間を用いて練習をしなければならないことも多々あり、その中で、時と場を考え、常に責任感をもって行動することや、周りの人と協力し合い、何かを成し遂げていくことの大切さを改めて実感しました。また、このようにオンラインの機能を駆使した行事は初めてで、この日に至るまでに、たくさんの人の努力と苦労がありました。

しかし、この大会を通して私たちは様々なことに挑戦する重要なチャンスをつかむことができたでしょう。新たなことに挑戦するのは、決して簡単で単純なことではありません。ですが、どんなときでも互いを思いやり、一丸となって行動したことにより、大きな困難が私たちの目の前で待ち受けていても、それを乗り越え、この工夫がこらされた偉大な大会を迎えることができたのだと思います。

今ここにある熱気と、今日というかけがえのない思い出が皆さんの心の中にあり続けることを願っています。(後略)(生徒会長 中2B 宇野 彩羽)

この文章は、10月25日(日)に実施した「ロン日 秋の紅白レクリエーション大会(以下、大会)」閉会式で、生徒会長・中学部2年宇野さんが発表した言葉を本人の承諾を得て抜粋したものです。

当日、大会は大盛況のうちに無事に終わることができ、YouTubeの限定公開によるライブ配信を御覧になった多くの保護者や関係の皆様から、喜びの声や教職員に対する^{ねぎら}いのお言葉をいただき、我々も大きな嬉しさと達成感を覚えたところでした。

この大会は、1学期末、運動会も文化祭も中止せざるを得なくなった中で構想されました。本校では児童生徒が「社会の中で生き抜く力」をつけ

られるよう、「自立・貢献」を合言葉に、学力の向上と非認知能力の伸長を図っています。新型コロナによって殆ど全ての行事をできないということは、本校にとって「貢献」…非認知能力育成の場を封じられたということに等しい意味がありました。このような中で、感染拡大防止の取組を遵守しつつ、全校行事として企画されたのがこの大会であり、企画にあたっての目標の優先順位を、1:安全,2:楽しい・盛り上がる,3:関わり・貢献・チーム協力,4:努力・成果・達成感 としました。レクリエーションとして各学年が取り組む3つの種目の中で紅白のチームとして勝負を競うだけでなく、紅白応援合戦と全校ダンスでは、中3と小6がそれぞれ制作した動画を元に全校児童生徒が練習し、当日はライブ配信と双方向の音声入力によって、教室から体育館競技への応援の声を届けるなど、学年を交えることなく「関わり」や「貢献」の場を設けました。これらの根幹をなしたのがICTを活用したオンラインでの取組です。7名のオンライン担当チームを中心に準備を進め、当初の構想では必須ではなかったYouTubeでのライブ配信を盛り込み、当日は席の温まる暇もないほどの活躍で大会運営を支え続けました。また、夏休み中から各教室へのWiFi設置工事でお世話になってきたIJの皆様にも本校で大会運営を見守っていただきました。どの教師も役割を果たすために奔走していた中、そうした教師陣の思いに応えたのが児童生徒の取組でした。当日までの子供達一人一人のエピソード全てを網羅することはできませんが、その“学び”は、当日の競技の中で十二分に表現されていたと感じました。

コロナ禍で失われた、人と人との関わり、その中からの学び、問い続けた「自分達にできることは何か」について、この大会は本校としての一つの答えになったと自負しています。児童生徒諸君をはじめ、大会に関わる全ての皆様に感謝申し上げます。